

子どもが夢みるささやかな幸せ

津守 真

ひとつの光景

Yくんが保育室のテーブルでカップラーメンを食べていた。傍に座っている私の顔をと
きどき見上げて、にっこりと笑う。心から嬉しそうで、私も幸せな気分になる。このカッ
プラーメンは、昨日、母親とおつかいに行って買ってきたもので、家に持ち帰ると、「あ
した、おべんとうもっていくの」と言っただけで自分のリュックにしまったのだという。学校に
くるとすぐにそれをリュックから出して、私にお湯を注いでくれと言ったのだ。昨日
から、学校で食べようと楽しみにしていたその時を、この子どもはいま味わいつつ、カッ

プラーメンを食べている。変わりばえのしない、いつもの保育室であるが、温かな幸福が漂っているように思えた。

ことばを話さなかったYくんは、だれかが自分の物に触れたり、大人に伝えたいことがあると、大声を張り上げた。その子が思い切って三語文を話したのは、余程、自分の思いが心の中にふくらんでいたのだろう。あした学校に来て私と一緒にこのテーブルで食べようと待っていたその瞬間がここにあった。

そこに別の子どもがきて、Yくんのカッププラーメンが欲しくて手を出した。私はYくんのこの時をこわしたくなくて、その子の手を押さえた。Yくんはそれを見ながら食べ終わると、カップの底に少しプラーメンを残して差し出した。その子にも、分けて貰ったとの気持ちで伝わったのだろう。受け取ると静かに食べて立ち去った。

保育の場面は、外側から観察すれば、その人の規準でいろいろな評価して判断される。しかし、どのひとこまにも子どもどもの心の思いがこめられていて、私共が大切に育てたいと思うのは、その人間の心である。

走る

Yくんは、この数か月間、ひる頃になると私の手をひいて外出したがる。その最初のときは、どこにゆこうとするのかが私に分からないうちに、この子は自分で門の鍵をあけて走り出したのだった。一番近くにいた私は、考える余裕もなく後を追って走った。まだ

幼稚園だけれども三年生位の体格のYくんは、私よりもずっと先を走りつづけて隣の公園を抜けた。私は走りながら、Yくんがときどき立ち止まって私を見ることに気が付いた。二度目から私は殆ど走らずに歩いてゆくことにした。いま、Yくんは、ゆっくりと歩き、ときどき私に手をつなぐ。追いかけて、自分が思っていた所に到達する前につかまえられるという思いが、子どもを走らせることがわかる。

こうしてYくんは、まずマクドナルドにゆき、それからスーパーマーケットにゆく。マクドナルドで、Yくんは欲しいものを指さすのだが、最初はよく分からなくて、Yくんは大声を張り上げ、周囲の人たちを驚かせた。Yくんには目あてのものがはっきりとある。ポテトのMとバナアイスクリームである。そのことが分かってテーブルについたとき、このときも、レストランのテーブルで私と向かい合って食べることが嬉しくて、私の顔を見上げては、何度ものこりと笑った。祖父と孫が平和に食事しているように周囲からは見えただろう。

この子どもが走ったのは、こういう幸せな時を大人と一緒に過ごしたいという気持ちが心の底にあったのだろう。だれかと一緒に食事をかこむ幸せは、だれもの心の中にあるに違いない。走る先に求めているものは何なのか、外在する目標物だけではなく、それ以上のもものが求められているのではないか。

買物

Yくんはスーパーマーケットに走ってゆく。スーパーマーケットは、子どもの目のゆきあたるところに欲しい物が満ち溢れている。三歳の孫と一緒にいったときに大変な思いをしたことが何度もある。Yくんが最初スーパーマーケットにとびこんだとき、孫で経験したときのように、欲しい物は買ってあげることによって、落ち着いて自分が欲しい物を見極める気持ちの余裕をつくろうと決めた。

その最初のときにYくんが籠に入れた物は、カレールーと、冷凍ポテトと、計り売りの肉だった。それにお菓子をひとつとると、スーパーの中を車を押して何度も回った後、レジにいった。Yくんはライスカレーが大好きである。結局、ライスカレーの材料を買って、家に帰るとすぐに母親にライスカレーを作らせたとのことである。毎回少しずつ選ぶものがかわるが、ライスカレーの材料であることは同じである。そのことが分かると、私もスーパーに行くのがらくになった。この点では、Yくんは自分の考えをはっきりもっていると言える。ただ、自分が納得できないことが起こると、大声を出してスーパー中の人の目をひき、更にそれが他人との間のもめごとになりそうになると私が止めるので、そういうときには余裕を失い混乱状態になってしまう。

あるとき、そんなことの後、公園に立ち寄ると、どうしても池の中にはいるという。私は、いつもYくんの考えを通してあげることが多いから、今日は私の考えを通させてもらうと説明して、半分ひきずるようにして学校に戻った。こういうときは私も疲れはてる。本人もきっと同様だろう。こんなことがときどきある。それでも学校に帰ると、Yくんは

私の後を自転車にのってついて回る。

パターンにはめようとする

Yくんは休みも多い方だし、私も用事で学校にいない日もあるが、毎週三日位はこうして一緒に外出する。毎回のパターンがきまってきた、この頃は気楽に外出できる。しかしときどきいつもと違うことが起こる。マクドナルドでハンバーガーがほしいときもある。それなのに私はいつも通りにポテトとアイスクリームを注文する。そのときには例の大声を出す。いつも同じと考えないで、毎回本人が選ぶようにしなければいけなかったと気がかされる。

ある一日、スーパーマーケットで、アイスクリームの大箱を籠にいったときには、私は良い顔をしなかった。ところが、学校にもどるとすぐに、Yくんはその大箱を保育室の机の上に出した。皆におやつを振舞いたいのだということがすぐに分かった。お皿を出してきて、ひととき、彼のまわりに他の子どもたちが賑やかに集まり、Yくんは満足そうだった。以前は、自分の物に他の子がちょっとでも手をふれると大騒ぎになったのに、スーパーで買物をするときにすでに他の子と分けようということがYくんの頭にあったことが分かる。

こんなことを通して、私は今日も昨日と同じに事が進むことを期待して、子どもをそこにあてはめようとしている自分に気付かされた。子どもは毎日違うことを考えている。保

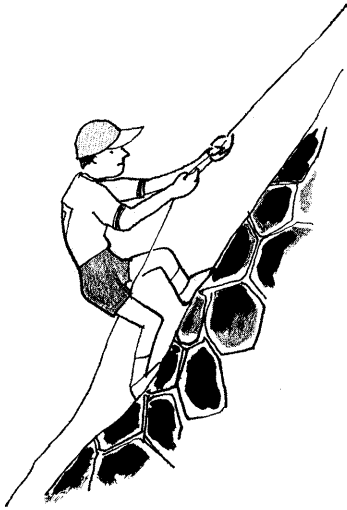
育者は、毎日同じように事が進んでいると安心する。だが、一日、一日、違う日である。裸になる

Yくんは外出からもどると、庭のやや高い所に吊るしてあるハンモックの上に毛布と布団をもってゆく。そして服も下着も全部ぬいではだかになり、私の手をひいてハンモックの上のり、毛布にくるまる。私の弁当もそこに持ってこさせて、一緒に食べることもある。もう二週間位つづいている。毛布にくるまっても冬の戸外は寒い。ことに陽がかげると急に冷えてくる。それでも、Yくんが裸ですり寄ってくる、じかに肌をふれようとすると親しみを覚えて、私もそう簡単に脱出するわけにもゆかない。

子どもが衣服を脱いで裸になるときは、社会的束縛と心の束縛もぬぎすて、さあ、これから思う存分に遊ぶぞという時である。いろいろの子どもを見ていて、このことはますます間違いがない。

Yくんは、以前には、いつも背中にリュックサックを背負っていて、遊ぶときも、帰るまでそれをおろさなかった。私は、彼が背負いきれない程の心の荷物をかかえているように思え、それから解放されることを願っているのだろうと察していた。このことを私は本誌の昨年八月号(92巻8号)に記した。いま彼はリュックを背中からおろし、衣服も脱ぎすてている。

そのときに彼がしたことは、買物とレストランの食事だった。外出したときに、歩き回



るのではなく、電車を見にゆくのではなく、このことを選んだということは、Yくんが家族一緒にレストランで食事をしたり買物にゆく光景を夢みていたのだらうと思う。けれども、そういう社会的場面では、彼は意図せずして悶着を起こしてしまう。おだやかにそれをなしたとき、この子は幸せであった。Yくんの心には変化が起こりつつある。私はこの子の夢を叶えてあげたいと思う。

(愛育養護学校)